

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作:ウッチャン大好きっ子

\* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

1. バロン……”B 2”の一人。
2. バラン……”B 2”の一人。

#### 解説 (既に存在する言葉について)

1. 管体…フルートなど横笛は口を付ける頭部管(とうぶかん)と孔の開いている管体(かんたい)。  
そして最後尾の足部管の三つに分かれます。  
その中にもっとも長く音程を変える機関部の事です。

#### 解説 (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. B 2 (ビーツー) …龍冴が率いている”死”の部門の一つ”アタック”のNO. 1・NO. 2のコンビである。
2. アタック …”死”の部門の4つの部隊の一つである。  
活動内容は突入など直接危険に身を投じる危険と隣り合わせ最前線部隊である。
3. 二勢連戟(にせいれんげき) …これは一度武器を仕舞い、相手の攻撃を全て避ける事に気の変換を行ない相手の後ろに付く。  
そして、高速での移動で得た勢いと武器を抜く勢いの二つの勢いを元に混乱する相手に高速連続攻撃を食らわせる。この時、武器には気を溜めてあるので、斬撃は気功刃と化す。  
但しこれは蓄積された気と二つの勢いを放出する為に暴走しやすく味方がそばにいる時は注意が必要。そしてこれは気功術と気の変換の両方を同時に使う高度術。
4. 光飛斬(こうひざん) …気功刃の応用術の一つ。  
刀身に限界まで気を溜め、大きく剣を振り切る際に溜めていた気を放出し続け斬撃を巨大な気功刃として撃ち出す高度気功術。  
気を放出し続ける為に非常に多くの気を使うので危険であり、  
綺麗に斬撃の弧を描く事は難しい。
5. 魔笛(まてき) …伝説上だけに存在している楽器であり武器である。  
その能力はその人には聞こえないような高低音が混じった音色で聞く者全てを魅了し、操ったり自由を奪う。  
しかし、元々は人々を幸せな気持ちにする為に作られたとされる。  
今では製造法は途絶えてしまったとされる。

~ 第100章 ~ <最高のコンビ>

- 射撃練習の翌日の朝 -

この日は、朝から龍冴の態度がおかしかった。

全員がミーティングルームに集まるや、口を開いた。

「今日は俺が用意した最高のコンビと2対2のタッグバトルを、してもらおう。  
殲滅作戦時、我々は君達の安全を重視するつもりだが、何が起こるか分からない。  
下手をすれば君達を守れなくなるかもしれない。そうなれば自分達で何とかするしかない。  
そこで、君達に連携という物を身に付けてもらいたい。」と龍牙は、はっきりと言った。  
「もしかして…。最高のコンビってまさか…。」と驚いた様子で蒼凱が訊いた。  
その蒼凱の動揺ぶりに、凱歌ときなこは互いに顔を見合わせ、緊張した。  
「そう、”B2”だ。」と龍牙は答えると、少し間を置いてから再び話し出した。  
「凱歌達と試合をする”B2”とは、俺が指揮している”死”の部門の一つである”アタック”と呼ばれる  
チームの事だ。”アタック”とは前に簡単にだが説明したと思うんだが…。  
彼らは突入など直接危険に身を投じる部隊だ。  
その中でNO.1とNO.2の二人がコードネームが”B2”というんだ。  
彼らの実力は個々では君達よりも下だ。  
しかし、1+1は2とは限らない。昔どこかで言っていたが、1+1は無限大というがまさにそうだ。  
君達にも”B2”ほどではなくとも互いの力を高められるほどになって欲しい。  
彼らと戦い、技術を盗んで欲しい。」と龍牙が笑顔で言った。  
しかし、その龍牙の笑顔に反して、蒼凱と天山の表情は緊張している様に見えた。

龍牙は二人を案内しようとしていると、きなこが話し掛けて来た。  
「龍牙さん。昨日貸してもらった銃をお返します。」と3丁の銃を差し出した。  
「ああ。忘れてた…。で、どれにする？」と龍牙は、微笑みながら訊いた。  
「私、これにします。一番使い慣れているので。」ときなこは、ザウエルP230を指し示した。  
「確かに銃は性能も大切だが、何より使い勝手だ。それじゃあ用立てておくよ。じゃ、行くぞ。」と龍牙は  
銃3丁を机の上に置くと、歩き出した。きなこ達はその後が続いた。二人の後から蒼凱と天山が、溜息を吐く  
とそれぞれ袋を持ち、後を追った。

龍牙の案内で、凱歌達が入った部屋は、今まで鍛錬で使ったどの部屋とも造りが違っていた。  
そこは完璧なコロセウム(闘技場)だった。その中心にポツリと一人誰かが立っていた。  
「ココは、主に見たままは死の部門などの戦闘能力テストなどで実際に武器を使用しての試合を行う。  
あそこに見えるのが今回の対戦相手だ。あれ？あいつはどこに行ったんだ？」と龍牙は周囲を  
見渡し始めた。すると、遠くに立っていた者が、こちらに向かって歩いてきた。  
近づくに連れてその姿がはっきりと見えてきた。  
その者は男性で身長が158cmぐらいに見え、とても真面目そのものの顔立ちだった。手には柄の長い金  
槌のような物を持っていた。そして龍牙の前にやってくると、ためらい無く跪いた。  
「龍牙様、お久しぶりでございます。この度のお呼び立て、ありがたき幸せ。」と男は頭を下げたまま、  
静かに言った。その声はとても優しく心地良いものに凱歌達は感じた。  
「毎回言っているが、その堅苦しい挨拶はやめてくれないか…。俺そういうの嫌なんだよね～。  
それに相棒はどうした？」と龍牙が訊くと、上の方から声が聞こえた。  
「俺ならココに居ます！」と言う威勢のいい声と共に、上から誰かが側に飛び降りてきた。  
その飛び降りてきた者は、龍牙の足元に跪いている男と同じ顔をしていた。  
しかし、その風貌は全く違っていた。

跪いている男は中肉中背の男だったが、今現れた男は、顔こそ同じだったが、その体型は跪く男に比べ筋肉質だった。そして、その腕などには傷跡が目立った。

同じ様に柄の長い金槌を手にしていたが、その金槌は跪く男の物よりも、先に付く円柱部が大きかった。「遅くなりました。お久しぶりです。龍冴様。」と、軽く頭を下げ言った。

「全く二人とも、全然態度が違うな〜。」と龍冴が言うと、二人が顔を上げ、凱歌達の前に並んで立った。

「二人とも紹介しよう。この二人こそ、さっき言っていた”B2”だ。

こっちがバロンだ。そしてそっちがバランだ。

見ての通り、彼らは一卵性の双子だ。」と龍冴は跪いていた男から説明した。

凱歌達は、バロンから順に見ていた。

見た目は二人とも自分達よりも10cm近く背が低く、年も40後半といった感じだった。

そして筋肉質のバランの方が強く見えたが、見た目で判断する事の危険性は、今までの鍛錬で二人とも身を持って知っていた。

「彼らこそ最高のコンピだと思わないか？

でも、二人は双子である以上に、他にも最高の組み合わせである理由がある。

この二人から色々と学ぶというか盗んで欲しい。

試合が終わってからは”B2”、二人の指導を頼む。」と龍冴は笑顔で二人に言った。

「彼らと私達が戦うんですか？失礼ですが、彼らでは力不足だと思います。」とバロンは冷静に二人を観察し言った。

「俺もだ。彼らは一人一人の能力は高そうだが、協調性に疑問がある。俺らとやるのは荷が重いと思う。」とバランも厳しい眼差しを向け言った。

きなこはその二人の言葉にカチンと来ていたが、ぐっと堪えた。

それは確かに協力攻撃は、ちゃんとやった事が無いという事実があった。

「まあそう言うな。やってみなければ分からないだろう。それに見た目で決め付けるのは良くない。

といっても二人の観察力は確かだが…。とりあえずやってみようじゃないか。」と龍冴が言うと

後ろから声が聞こえた。

「そうです。やってみてから言う事です。二人はそこいらの、ただ、強いだけの奴じゃない。」と天山が言うと、きなこに持ってきた袋を渡した。

そして耳元で「自分の特性を活かしなさい。そして相手の作戦に乗らない様に。」と肩を叩き、言った。

「そうですね。二人は命を預け合った仲ですからね。きっといい勉強になると思います。」と蒼凱が言うと天山と同じ様に持ってきた袋を、凱歌に渡した。

天山と同じ様に耳元で「二人それぞれに違う特性があります。それを意識していれば大丈夫です。」とアドバイスした。

「悪いな、二人とも。凱歌達。その袋の中には、今まで使っていた練習用の武器よりも本物に近い物だ。

”B2”が使う物は本当に使っている物を使うからな。彼らが使うのは見て分かるが槌。つまりハンマーだ。しかし、侮る事無き様に。

刃は肉を切り裂き血を流す。目に見えるが、打撃は痣を作り、内に多大な衝撃を与える。

つまり目に見えづらく、ダメージを判別しづらい。」と龍冴から笑顔が消え、その目は師匠の様だった。

二人はその龍冴の言葉の重大さを、まだ理解していなかった。

そして袋からそれぞれ武器を取り出した。

それぞれの武器は、今までの飾り気の無い物からシンプルではあるが、宝珠などが付いていた。

そしてその刀身は研がれ、柄のフィット感は更に増していた。  
それはまるで自分の手に吸い付く様で自分の体の一部の様にさえ思えた。  
まさにこの武器は自分達の為に作ってあるのだと再度二人は実感した。  
「それじゃあ、そろそろ始めるぞ。」と龍牙は部屋の中央に立って言った。

#### ～第101章～ <最後の試練>

龍牙を挟んで右に”B2”が悠然と立っていた。その反対側に凱歌達が、それぞれの武器を腰に付けて立った。暫しの沈黙の後、龍牙は両者を見て「それでは始める。構えて。始め！」と声を上げた。  
凱歌達は、互いに剣を抜き構えたが、”B2”は互いに間を取ったものの、金槌を地面に付けたまま、様子を伺っていた。その表情には余裕がはっきりと見えた。  
凱歌ときなこは目で合図すると、凱歌は剣を鞘に収めると、初見での判断ではあるが、比較的戦いやすそうなバロンに向かっていった。  
バロンはその凱歌の行為に、余裕の笑みを浮かべたまま、バロンから離れた。  
バロンに至っては一切動く事無く、走り込んでくる凱歌を待っていた。しかし、その時突然、きなこがバロンの背後に現れた。  
そして走り込んできた凱歌の蹴りと、きなこが手にしていた剣が、同時にバロンに襲い掛かった。  
二人は『確実に当たる』と確信を持ったが、寸前で気配が消え、衝撃もなかった。  
バロンは二人の攻撃が当たる直前、わずか1cmの間合いから抜け出していた。  
そして悠然と槌は床に置き、5mも先に立っていた。息一つ乱れていない。  
突然バロンが大笑いした。  
「本当にそれで龍牙様の指導を受けたのか？ そんな遅い動きで兄貴に勝てる訳がない。  
確かにそこの女の子はいい動きだった一般的に見れば凄いだろうが、ここは普通じゃない。  
そのくらい出来て当然だ！ ましてや兄貴に向かって行くとはい…。それに君達、折角の力を使い切れてないよ。同時攻撃ばかりが全てじゃないよ。何の為に組んでいると思ってる？  
まあ、それを分からせる為に、俺らと試合をするんだけどね」とバロンは目に涙を浮かべながら言った。  
その間もバロンはじっと二人を見ていてだけで、何も言わなかった。しかし、その表情に焦りなどは一つもなかった。  
「それじゃあ、そろそろ本腰入れてやりますか！ ちゃっちゃと終わらせようかな。  
これが本当のコンビ攻撃というのを見せてやるか。なあ兄貴？」とバロンがバロンを見ていた。  
「そうですね。あまり早い決着も、かわいそうかもしれませんが、貴方がそう言うならいいでしょう。」とバロンは、そのバロンとは対照的な落ち着いた声で答えると、静かに槌を持ち上げた。  
「ただ終わらせるのも失礼だから、俺らの必殺技で片付けてやる。」とバロンは挑発する様に、槌を凱歌達に向け言った。  
その言葉にバロンは「ハァ～」と溜息をつき、『全く』といった感じで両肩を上げる動作を見せた。  
きなこは一瞬周囲を見ると、蒼凱と天山が武器を手に構えているのが見えた。  
それほどに危険なのかと、きなこは気を引き締める事にした。  
「では、先程のお礼としまして、私から行かせてもらいます。」と静かにバロンは言い、二人向かって進み始めた。そのスピードは、先程の凱歌とさほど変わらない一般的なスピードだった。  
しかし徐々に加速し、鍛錬をした二人ですら目で追うのが精一杯の高速で、二人の周囲を回り始めた。  
凱歌ときなこは、互いに背を向き合い、武器を構えた。

「あまり女性に手を上げたくありませんが、仕方ありません。許して下さい。」とバロンの落ち付いた声が聞こえると同時に、激しい打ち込みが始まった。

その回転の中で、突然振り出される槌の攻撃は、まるでバロンが分身したかの様に、残像を残していた。凱歌もきなこも、その攻撃を、全て防ぐ事が出来ず、袋叩き状態になってしまった。

バロンが攻撃を止め、離れた時には、きなこよりも多く打ち込まれた凱歌は、肩膝を付いてしまった。そして二人は体が重くなった様に感じた。

それはそれほど目立つ外傷は無いものの、骨の髄まで響く攻撃だった為だった。

この時、初めて龍牙が言っていた事が分かった。打撃の方が、斬撃より体に来るものである事を。

「おいおい、こんな単なる打ち込みで倒れるなよ。これは挨拶代わりだし、こんな攻撃力の低い兄貴の攻撃だぞ。そんなんで殲滅活動に付いて行く気か？龍牙様方はどう評価してるか知らないけど、それじゃあ単なる足手まといだぞ。」とバランは二人に、がっかりしたような声で言った。

その言葉に二人に火が付いた。凱歌は立ち上がりバランを睨んだ。そこに立っていたのは先程とは違う”スナイパー王凱歌”がいた。

きなこも、沸沸と燃えていた闘志を、勢い良く燃え出した感じだった。

「やっと本気になったか。全く時間の掛かる奴らだ。でも、その目。楽しませてくれそうじゃん。」とバランが笑った。

「バラン。本気にさせた以上は、油断大敵です。」とウキウキしているバランにバロンは、二人の実力を加味して釘を刺した。

バランは『分かってるよ』という様に頷き、槌を構えた。

きなこは凱歌に近づき、手を翳した。

凱歌は突然の事に驚きつつも、冷静に、きなこがやっている事を考え、理解した。

バロン達はその行動に少し驚いていた様だった。

「お前らも出来るのか治癒術？そうか、気功術が出来るとなると、こっちも心置きなくこいつが使える。」と槌を肩に乗せながらバランが言った。

そう、きなこは凱歌の傷を癒していたのである。

「もう！頭にきた！！調子に乗らないでよ！私とホイさんの実力はこれからよ！」ときなこは怒鳴った。

「おお。気が強い女は嫌いじゃない。でも、その言葉に、実力が伴っているといいけど。」と、まだ余裕を見せるバランが言った。

二人のガキのような状態に、龍牙は深い溜息を吐き、頭を抱えてしまった。

そしてきなこは、バランに向かっていった。それに付いて行く格好で凱歌が後ろに付いた。

バランもじっと動かず、待ち構えていた。

二人の激しい斬り込みと蹴りなどの打撃をバランは槌と全身を使い捌いていった。

しかし、先の事で連携が生まれつつある二人の攻撃に押され始めていた。

「くっ。」とバランが押され始めた事から、歯を食い縛った瞬間、バランを取り囲んでいた凱歌ときなこは体が中に浮く感覚に突然捕らわれた。

二人は慌てて体制を整え地面に着地した。

二人がバランを見ると、そこには遠くで見ているだけだったバロンが、槌を右手に持ち振り切ったまま立っていた。

「流石、龍牙様方に見込まれただけはあります。でも、これ以上弟が苦しむのは見たくなかったので割らせて頂きました。

それでは、これからこの試合の本当の目的である、タッグバトルをしましょうか。」と今までの優しい感じが一変した。そう、それは優しいホイさんが、スナイパー王凱歌に変わるかの様に…。

「バルン。行きますよ。」とバルンが言うと「あいよ、兄貴。」とバルンが答えると、そっとバルンの影に重なった。凱歌ときなこは、その言葉に相手も本気になった事を理解し、身構えた。

バルンはその高速を活かし、二人を翻弄し、二人の連携をことごとく崩していった。

そしてバルンに気を取られていると、スピードこそ二人に劣るが、力では上であるバルンの攻撃が不意を突いて来る。何よりバルンの一撃を当てる為に、バルンはバルンの動きを隠す様に動く。

凱歌は龍冴の言葉を思い出していた。

『凱歌。もしどうしても攻撃が当たらないような高速攻撃を得意とする相手や、捌き切れないほどの数の相手と戦う時がきた時、今から教える技は有効だ。しかし、味方の位置をしっかりと考慮しなければならない。』

そう、技を使う事に味方が気が付かない事がある。その時は相手の動きを予想する事…。

そして、それは味方の”次の攻撃”に繋がる。』

凱歌は自信が無かった。きなこの動きを予想する事に…。

きなこを思う気持ちは、誰にも負けない自信はあった。でも、彼はきなこと共に過ごした時の少なさを悔しく思っていた。

その時、きなここと目が合った。その目は何人たりとも隙いる事の無い、絶対の信頼の眼差しだった。

その瞬間、凱歌は分かった。『過ごした時の長さでは短い、大切なのは信頼。思い。』だと。

そして龍冴から教えられた技を使う為に、きなこに合図し、バルン達と距離を置いた。

読春刀を両腰に付けている鞘に仕舞い気を集中した。

そして、刀を手にしないまま、バルンに向かっていった。

その行為にバルンは一瞬動じたが、止まる事無く、凱歌に攻撃の牙を向けた。

今まで防ぐ事で一杯一杯だったバルンの高速連続攻撃を全て避け、バルンとその後ろにいたバルンを超えて少し行った所にあった壁を踏み台に、一気に向きを変えた。それを見てきなこは、バルン達から離れた。そして両腰に付いた読春刀を引き抜いた。その刀身は光り輝いていた。

引き抜いた勢いと、方向転換の勢いのまま、バルンとその後ろにいたバルンに無数の透明な刃が斬りかかった。

『これは”二勢連戟”！？』とバルンが思った瞬間、二人に無数の刃が襲い掛かった。

バルンはバルンの前に立ち、襲い掛かる刃を捌いて行くが、捌き切れず切り傷が増えていく。

その間にバルンは気を集中しようとしていた。

きなこはバルンの行動を見て天山の言葉を思い出した。

『龍冴は凱歌が特別な技を教えます。必ず。』

その技はある特定に範囲内にいる敵に有効な技です。しかし、それは同時に範囲外にいる敵にはチャンスに成りかねない。そこで、きなこさんには、その範囲外にいる複数、もしくは強敵を範囲内に入れ、なおかつ

大打撃を与える技を教えます。』

それに対して、『どうしてそれを教えると分かるんですか？』ときなこは訊いた。

『そうですね…。勘です。長年組んできた相方としての勘、そして信頼です。』

いつかきなこさんと凱歌の間にも生まれますよ。もうあるかもしれませんが…。』と微笑んでいた。

きなこは今がその天山が言っていた特別な技で、それと相性のいいこの技を使う時と感じた。

そしてきなこは顔を閉じ、太極剣の刀身を左の平に載せ押さえると、ゆっくりと左に引いた。

その刀身に光が伝わっていった。

バルンが光り輝く槌を高々と掲げると、きなこは瞼を開け、バルンに狙いを付けた。

そしてバルンときなこは、同時に技を繰り出した。バルンは槌を地面に叩き付けた。

すると地面が地割れを起こし、起伏した。

きなこは光り輝く太極剣を大きく振り切った。

その斬撃は美しい光の弧を作り出し、バルンに襲い掛かった。

バルンはきなこの攻撃に気付き、まだ光り輝く槌で防ごうとしたが吹き飛ばされた。

そしてその光の斬撃は離れた所にいたバロンにも襲い掛かった。

バロンは斬撃には触れず飛び避けた。

『今のは”光飛斬”！ 一体何という技を教えるんだ…。』とバロンは下唇を噛み締めていた。

凱歌はバルンの攻撃により阻まれ、起伏の範囲外へと離れた。

そして、きなこの大技に驚いていた。

「全く…。こんな大技を教えるなんて聞いてない…。それに結構、連携攻撃が出来てるじゃないか！」と

バルンが起き上がりながら言った。

「確かに素晴らしい連携ですが、所詮は真似事。これは龍牙様と天山様のお得意の連携攻撃の一つ。

でも、それをやってのけるとは…。」とバロンは言った。

しかし、凱歌と、きなこは、これが龍牙達のコンビ攻撃とは知らなかったが、なぜか納得した。

龍牙の口調も、天山の口調も相手を考えている様だった。

息の荒くなっていた、きなこはゆっくりと息を整え立ち上がった。

そしてバロン達と凱歌達の試合は激しさを増していった。

その中でバロンとバルンの武器がいかに特別かを思い知る事になった。

個々の能力は凱歌達の方が全体的に高いが、完璧な連携のバロン達に再び押され始めた。

そして、バルンの槌は気を込め、地面に打ち込む事で、大地を操る槌であった。

それにより何度と無く足元を崩され、二人は苦戦した。

そして、バロンの槌の正体が遂に明かされた。

徐々にバロン達と戦っている内に、連携が取れてきている凱歌達に、バロンが押され始めた。

バルンが二人を惹き付けた瞬間、凄まじい突風と気功刃が二人に襲い掛かった。

凱歌がその風上を見るとそこにはバロンが光り輝く槌を翳していた。

そうバロンの槌は、風を操る事の出来る槌だった。

二人は今までの攻撃に加え、風とより洗練された連携にコテンパンにやられてしまった。

とどめを刺そうとした時、龍牙が止めに入った。

「これがここで頂いた力で、信頼の証。

でも、君達は、それをもうじき手にする。いや手にしている。」とバルンは言うと、龍牙を意味深に見た。

二人は「手にしている」という言葉の意味が分からなかった。

「しかし、二人ともなかなかの連携だったな～。実はもっと早くやられると内心思っていたんだ…。

しかも、二人に”地槌”(ちづち)と”天槌”(てんづち)の力を使う事になると思ってもみなかった。」と龍牙が

頭を掻きながら言った。

「しかし、天山。お前、”光飛斬”を、きなこさんに教えるなんて…。」と龍牙は向かっている天山を見ながら言った。

「それはお互い様です。貴方も”二勢連載”を教えるには、早すぎませんか？」と龍牙をしっかりと見ながら

答えた。

「二人とも、お互いの事考えて、教えたんじゃないんですか!？」と蒼凱が二人の会話を聞いて驚いて言った。

龍冴と天山は同時に「そうだ。」とはっきりと答えた。

「しかし、ここまでの大技とは思ってなかった…。」

それに出来るとは、教えた当初は思ってなかった。」と龍冴は続けた。その言葉に天山は頷いた。

そして龍冴は凱歌達に”B 2”から指導を受ける様に指示した。

バロンは嬉しそうに「分かりました。」と凱歌達を、見ながら答えた。

バロンはゆっくりと龍冴に了解の深いお辞儀をした。

天山と蒼凱は鍛錬の手伝いを課って出た。

~ 第102章 ~ < 不穏な影 >

連携の練習が始まり、龍冴はその光景を遠くから見ている。

すると1時間ほどして、プロフェッサーが龍冴を呼び出し、部屋を出ていた。

凱歌はその光景を見た時、胸に何かがよぎった。不穏な何かを…。

しかし、すぐにそれを考える事が出来なくなった。

バロンは論理的に説明をしてから、練習すべきと考えていたが、バロンは頭で理解するより、体で覚えるべきだと考えていた。

二人は、しばらく話し合った結果、簡単な説明をする事になった。

それからは、バロンがホワイトボードを使い説明をした後に、バロンとバロンが天山達を相手に見本を見られるような格好で教え始めた。

- 2時間後 -

3時間のバロンとバロンの鍛錬が終わった。

バロンは終了報告の為に、龍冴に連絡を取るとしたが、全く取れなかったの、探しに行く事になった。

凱歌達も今後の事を聞いていなかったの、共に探す事にした。しかし、全く居所が掴めなかった…。仕方がなく全員、ミーティングルームに行く事になった。

- ミーティングルーム -

全員が部屋に入ると、蒼凱はそそくさと、お茶を用意した。

その手際の良さに、凱歌ときなこは、互いに顔を見合わせた。

「きなこさんは、コーヒーでいいですか？凱歌はウーロン茶の方がいいですか？」と蒼凱が訊いてきたので二人は頷いた。「お疲れ様でした。飲んで下さい。」と蒼凱が二人の前に飲み物を差し出した。

蒼凱は続いて他の皆にもテキパキと飲み物を配っていた。

”B 2”の二人は、使徒である蒼凱に、そんな事をさせてと、かなり困惑していた。

全員飲み物を飲みながら、色々と話をしていた。バロンは天山に、これまでの仕事の話をしていた。

蒼凱とバロンは凱歌達を労っていた。そんな時、凱歌があつた事を思い出して話し始めた。

「そういえば…。鍛錬が始まって1時間ほどしてから、龍冴さんがプロフェッサーに呼ばれて出ていくのを見たんです。なんかこう…。胸騒ぎがしたんです…。でも、今の今まで忘れてました。すいません。」と凱歌は申し訳なさそうに言った。「すぐに謝らない!」ときなこが言った。

「すみません。」と凱歌が言った。「ほら、また！」ときなこが言った。

そんな凱歌ときなこの、取り留めもない会話の中、天山と蒼凱は緊張した顔で顔見合わせていた。

二人の表情に気が付いた、きなこは凱歌から目を離し二人を見た。

「どうしたんですか？」ときなこが訊く。

「まさかとは思うけど…。プロフェッサーと出たというのは、まずいかもありません。」と蒼凱が答えた。

天山は考え込んでいた。その姿に全員、にわかに緊張してきた。

その時、施設内に、大きな放電音と共に悲鳴が響き渡った。

天山と蒼凱は冷静に、音の発生先を調べ始めた。

そして、場所が特定されると、天山は部屋を飛び出した。凱歌ときなこも続いた。

バラン達も行こうとしたが、蒼凱は二人は残る様に指示すると、慌てて出て行った。

バラン達は、その指示に従ったものの、不本意に思えた。

凱歌達は、天山のあまりの足の速さに、あっという間に離されてしまった。

後から来た蒼凱が追いついて来た。

「あれ、バランさん達は？」ときなこが訊くと「待つ様に言ってきました。」と蒼凱を答えた。

その言葉に、二人は疑問に感じた。

「恐らく、二人には見せない様がいいと思いましたが、ここです。」と蒼凱が指を指し走るのをやめた。

指を差した先には、扉の前で待つ天山が居た。

その扉には”特殊実験室”と”許可無く立ち入り禁止”という二つの立て札が掛かっていた。

「間違いなくここだ。やっぱり…。しかし何でこんな時に…。」と天山は顎に手を掛け言った。

「とりあえず入りましょう。考えるのはそれからです。」と蒼凱が言った。

そしてゆっくりと天山が扉に手を掛けた。扉は音を立てる事無く、ゆっくりと開いた。

全員室内に入ると、そこは薄暗く誰かが立っている事が、なんとか分かる状態だった。

しかし、凱歌にはしっかりと、全てが見えていた。

昔からだった。人には見えないような暗闇の中でも、物がはっきりと見えるのである。

そこにはベットに横たわる龍牙と、その隣に立つプロフェッサー。そしてその向こうにはカーテンが引かれていた。蒼凱が電気を付けようと探している。

そして天山がプロフェッサーに話し掛けようとした時と、呻き声が聞こえた。

全員が呻き声の聞こえた方を見て、目を細めた。(暗く見えない為)

するとカーテンの向こうで、誰かが起き上がった。

カーテンの向こうには僅かに光源があった為に、淡く弱いシルエットがカーテンに映った。

そのシルエットはゆっくりと頭を抱えながら起き上がった。

その首からはケーブルのような物が、伸びている様に見えた。

「痛ってえ～。一体何があったんだ？」という声が聞こえた。

その声は間違いなく、龍牙の声だった。しかし、凱歌には信じられなかった。

何故なら、今そのシルエットの映るカーテンの前には、龍牙が横たわっているのだ。

凱歌が混乱していると、ゆっくりとカーテンが開いた。そこにはしっかりと龍牙の姿があった。

「龍牙、一体何があったんだ？」と天山が訊いた。

「龍牙？俺様は禍悪主だ。あんなガキと一緒にするな。あ痛たた…。」と答えると、再び頭を抱えて俯いた。

その時、蒼凱が灯りのスイッチを見つけ、灯りを付けた。

一瞬、その灯りに目が眩んだが、すぐに慣れた。

そして、全員が凱歌の目に見えていた、有り得ない光景が見えた。

全員がその光景の理由を求めて、プロフェッサーを見た。

その時、未だに横たわっていたもう一人の龍冴が動いた。

そして、同じ様に頭を抱えて起き上がった。ゆっくりと凱歌達の方を見た。

「痛たたた…。あれ？凱歌に、きなこさん？もう鍛錬終わったのか…。もうそんなに時間が経ったのか…。」と龍冴が言った。その喋り方は、まさに龍冴だった。

全員、驚き絶句したまま、禍悪主を震える指で指し示した。

それに気づき、不思議そうに龍冴は振り返った。

そして、禍悪主と龍冴は、絶対にあるはずの無い光景を目にした。

一瞬、互いを見たまま固まっていたが、プロフェッサーの後退りに気が付き、二人は同時にプロフェッサーを睨んだ。そして同時にプロフェッサーの白衣の襟ぐりを掴んだ。

「一体俺(様)に何をした！」と同時に怒鳴った。

そのあまりの息のぴったりさと、怒鳴り声にプロフェッサーは恐怖に固まっていた。

禍悪主は空いている右手を振り上げようとしたが、バランスを崩した様に力無くベットに倒れた。

「説明するから放してくれ。」とプロフェッサーが言ったので、龍冴は静かに手を放した。

そしてプロフェッサーを放すと龍冴と起き上がった禍悪主はケーブルを外そうとした。

「まだいかん！」というと何かの機械をいじると「これでいい。外していいぞ。」とプロフェッサーは言った。

許可が出たので二人はケーブルを外したが、そのやり方はまさに正反対だった。

龍冴は静かに、そして丁寧に外したが、禍悪主は怒りから乱暴に外し、ケーブルを放り出した。

「で、一体何をしたんだ！俺様の体に！！」と禍悪主が言った。

「俺様の”って…。」と龍冴は苦笑いしながら呟いた。

蒼凱はプロフェッサーを確かめる様に、見つめていた。

プロフェッサーは黙っていた。それを見かねて蒼凱が口を開いた。

「プロフェッサー…。やっぱりあの実験機を勝手に使ったんですね？」と蒼凱がやや怒った感じで言った。

プロフェッサーは静かに頷いた。

「どういう事だ？蒼凱、知っていたのか？」と天山は疑いの眼差しを向けた。

「知っていた訳じゃないんですが…。でも、知っていたと言ってもいいかもしれません…。」と蒼凱は言葉を詰ませた。

「これは、僕の情報の部門とプロフェッサーの研究の部門。

そして龍冴の生の部門が共同研究していたものを、プロフェッサーが応用したんだと思います。

でも、僕は情報を提供しただけなので、全てを知りません。」と蒼凱は言い終えるとプロフェッサーを見た。

そして沈黙の後、プロフェッサーは静かに口を開き、説明を始めた。

「その研究とは、簡単に言えば”人格の移動”。

この研究が完成すれば人類の夢といっていい。不死を可能に出来るかもしれない。

それだけが目的ではない。これは”義体”の為じゃった。

研究している内にふと閃いてこのシステムを作った。

理論上は問題は無い。」とプロフェッサーは言った。

「ちょっと待て！博士は理論上はって事は、出来るか不確定な物を、俺様達に使い、危険に晒したのか！！」と禍悪主は博士に怒鳴った。

プロフェッサーは一瞬動じたものの、冷静に受け止めている様子だった。

龍牙はこの二人のやりとりを啞然としているような、納得しているような複雑な感じで見ている。

その心中は『プロフェッサーならこんな事は日常茶飯事……。やっても不思議はないかも……。』と思っていた。

そんな、暫しの禍悪主の睨みが続いた後、諦めた感じになり真剣な面持ちで禍悪主は口を開いた。

「終わってしまった事をどうこう言ってもしょうがない。それに成功したんだから良しとしよう。

それで、その”義体”って言うのは俺様の方だな？

それにどれくらいこのままで居られる？一生という事はあるまい。」とプロフェッサーを直視し言った。

「確かにその体は”義体”じゃ。そして永遠にとはいかない。

所詮は作り物であり試作品だ。それに”人工脳”には生体消耗品だからな……。」とプロフェッサーは考えながら答えた。全員が「人工脳！？」と声を上げて驚いた。

「ん？そんなに驚きか？別に他人から取り出した訳じゃないぞ。これは、龍牙のDNAから使った物だ。

期限はその脳が決める。正確には、脳と禍悪主の意思とのシンクロ率が決める。

期間は長くて1週間前後。下手をすると明日には限界がくる……。」とプロフェッサーは答えた。

その答えを聞き、禍悪主は静かに振り返ると、後ろに居た龍牙を睨み付けた。

龍牙もその禍悪主の視線に答える様に禍悪主を見つめた。

「またとないチャンスだ。龍牙、俺様と戦え！」と禍悪主は言った。

龍牙は深く長い瞬きを1度し、再び禍悪主を見ると「こちらこそ望む所だ。」としっかりとした声で答えた。

二人は睨み合い、沈黙が場を支配して行った。

しばらくその睨み合いが続くと、その沈黙を破る者が現れた。

「二人の戦いもいいですが、是非私とも戦って頂けませんか？」と禍悪主を見ながら、天山が言った。

禍悪主は龍牙から天山に視線を移し、暫く見てから笑いながら言った。

「いいだろう。俺様もお前と戦ってみたかったんでな。お前は？」と禍悪主は答えた。

「僕ですか！？」

僕は天山さんと戦うだけで精一杯ですから……。ご遠慮させていただきます。」と蒼凱は頭を下げた。

「お前ら二人は俺が鍛えてやる。」と凱歌ときなこを、禍悪主は睨み言った。

二人はその凄まじい禍悪主の視線に一瞬後退りしてしまった。

「ですが、貴方が武器が無いのは、やっぱり正々堂々とは戦えない。

どうするんですか？」と天山は言った。

「確かに。いくら使わずとも勝てても相手に対して失礼だからな。」と禍悪主は冗談混じりで言った。

「その事なら心配ありません。こちらで用立てさせて頂きましたから。」と天から柔らかく語り掛けるような感じの音が響いた。

「内村様、見てらっしゃったんですか？」と龍牙が聞いた。

しかし、その答えを聞く前に禍悪主が口を開いた。

「用立てる？俺様に返すという事か？」と禍悪主は眉間に皺を寄せ、疑うような目で言った。

「その通り。禍悪主さんと呼ぶべきかな？まあいいい。

君に愛器を返す。それを使う事も許可する。」と内村は変わらない声で答えた。

「いいのか？俺様の元に二つも揃えて。」と禍悪主は怪しい輝きを見せながら言った。

「今の君のどこに危険がある？

今、殺人をする理由も、意味も無いだろう？

そんな無意味な事をわざわざするほど君は愚かではないだろう？」と内村が禍悪主を試すかの様に言った。

禍悪主は俯き、クスクスと笑い出した。

「確かに。今の俺様には無意味で、不利益な事ばかりでしかない。」と禍悪主は答えた。

そして内村は、全員にミーティングルームに行く様に指示をした。

全員は静かにミーティングルームに向かった。

- ミーティングルームの入り口前 -

「それじゃあ入ろうか？何かあるか楽しみだ。」と禍悪主は不敵な笑みを浮かべながら言った。

そして禍悪主は扉を開いた。

室内にはこれと違って変わっていないような気がしたが、禍悪主だけは真っ直ぐ中央の机に向かって歩き続けた。

全員が見ていると机の上には漆黒の長方形に箱があった。

それは凱歌達がここに来た当初に見せられた物だった。

それを禍悪主が手にした。その姿に龍冴は恐ろしいものを見ているような感じだった。

それに対して禍悪主は失った自分の一部が戻ってきたような、そんな感じで箱に触れていた。

「何があったか覚えてなくても身で分かるようだな。こいつこそが、俺様の暗殺の要だからな。」と振り返り、龍冴を見ながら言った。そして、禍悪主は龍冴を呼んだ。

「左手貸せ。」と禍悪主は言うも龍冴の左手を取り、箱に押し当てた。

龍冴が痛みに顔を歪めた。見ると龍冴の左手から血が滴れた。

すると箱が音を立てて開いていった。中からバラバラになったロッドのような物が数多く出てきた。

それを禍悪主は手慣れた手付きで組み上げていった。

組み上げたその形は刃の付いてない鎌のようだった。

凱歌ときなこはその刃の無いロッドが”心の間”で見た物とそっくりで一部である事に気が付いた。

しかし、そのロッドには錆びなど痛みがはっきりと見えていた。

長きに渡り、手入れどころか外気に触れる事もなかった事が覗えた。

そして、禍悪主はその組み上がったロッドをゆっくりと回し始めた。

ロッドは空を切り全員に心地良い笛の音のような高音が耳に入ってきた。

その音に全員目がトローンとし全身から力が抜け、同時に思考が止まっていった。

そして、全員がまるで素晴らしい夢を見ているような感覚に囚われていた。

しかし、例外が一人だけ居た。それは、龍冴だった。

龍冴は全員の変化に気付き、周囲を見渡した。そしてその原因が禍悪主にあると気付き、見た。

禍悪主は呆然とロッドを回し続けた。その時、今まで心地良い音色に乱れが生じた。

それにより、全員が夢から醒める様に感覚が僅かずつだったが戻ってきた。

天山、蒼凱、プロフェッサーの三人は首を横に振りながら異変の理由を考えていた。

そして、三人は同時に答えを見出し、禍悪主を見た。

「まさか！それは”魔笛”なのか？」とプロフェッサーは動揺しつつ訊いた。

その言葉に龍冴は驚き、禍悪主を見た。

禍悪主は静かにロッドの回転を止めるとロッドを調べながら答えた。

「ああ。確かにこいつには”魔笛”の能力が搭載されている…。

しかし、それも終わりだ。”管体”に損傷がある。

これでは、”魔笛”の役目を果たせない。今のが限界だ…。」と冷静にしかし、寂しげに答えた。

ロッドの回転が止まった事で全員の異変が元に戻っていった。

「でも、何で俺には効かないんだ？」

それに「魔笛」ってあの伝説の……。」と龍冴が質問をしている最中に禍悪主が『下らん』という雰囲気です。

「当たり前だ！己に効いてどうする！」

いくら貴様に自覚が無かるうが、体が対処法を覚えているんだよ！

それに貴様が言った通り、これこそが伝説の楽器であり武器である「魔笛」だ。

その音色で聞く者全てに幻覚など心身を魅了する。

時には自由を奪うだけでなく、操る事も可能だ。

しかし、それはとても繊細な調整の元に成り立っている……。

一度、「管体」部に僅かな傷でも付けばその能力を失う。

こいつは、もはやただの横笛だ。」と説明した。

「じゃあ、もうダメなのか……。直す事は出来ないのか？」と龍冴は訊いた。

「俺様が使う武器は、全て俺様の手で作られているんだぞ。

材料と場所があれば、すぐにも直すのだがな。

それに今や「魔笛」を作るのは俺様だけの様だからな。」と禍悪主は答えた。

龍冴は『直したい』という禍悪主の見てとれる思いに困惑した。

ここに居る者には、それを許可する事も拒否する事も出来なかったのである。

その時、再び声が響き渡った。

「ずっと聞かせてもらったよ。修繕についてだが、許可しよう。材料や場所は龍冴に聞いてくれ。」と内村は言った。

「おい！刃が無いのはいいとしても、宝玉はどうした！」と禍悪主は怒鳴った。

「すまないが、我々が預かっているのは、それだけだ。」と丁寧に内村は答えた。

「宝玉ってまさか！？」と龍冴が慌てて訊いたが、禍悪主はうるさいと言わんばかりの顔した。

「お前の考えているので正解だ。だが今は黙っている。

博士、俺様がどのくらいこのままで居られる時間は本当に分からないのか？

目安が無いと予定も立てられん。」と禍悪主は龍冴の質問を簡単に答えるとプロフェッサーに質問した。

「確実とは言えないが調べる事が出来る。」とプロフェッサーは答えた。

「どうすればいい？」と禍悪主が訊くと「人工脳とのシンクロ率を調べれば良い。」とプロフェッサーは答えた。

禍悪主は「すぐにやってくれ。」と言い、さっさと部屋を出て行ってしまった。

取り残される格好になった5人はお茶を飲みながらゆっくりと待つ事にした。

蒼凱はそそくさと全員に飲み物を出し、席に着いた。

凱歌ときなこ達は3人に色々と話をして過ごす事にした。

この間に禍悪主の時が決まろうとしていた。

- 続く

～あとがき～

第20回を最後まで読んで頂きありがとうございました。

約2ヶ月ぶりとなりましたこと、誠に申し訳ありませんでした。本当に長い事お待たせしました！

この二ヶ月の間に色々となりましたが、特に22日は私達恋スナファンには記念すべき日ですね。

そう、『恋人はスナイパー 劇場版』のDVDの発売です！

私も仕事でみる事が出来ない日が続いていたので、やっとコメントリーが見れた時は「やっと…」という感じでした。

しかし、内村さん達の言葉に考え込んでしまった部分もありました。(現実逃避気味の所も…。)

今回のストーリーですが、ますます現実離れが進んでしまいました。

そして、今まで読んでいる方には「これは？」や「あれ！？」というような事があったと思います。

実は書き始めた当初と設定が変わっている所がありますが、色々と先を考えると変えざる負えなかったのです。

どうかご了承承願います。これからも1ヶ月に1度を目指して書いていくつもりですのでよろしくお願いします。